

テーマ②：「生きる力」

1. 「一つの歯車」
2. 「一長一短」
3. 「想いと直感で歩む人生」
4. 「もしそれがやりたい仕事でなかったら」
5. 「向き不向き」
6. 「自分探し」
7. 「2：6：2の法則」
8. 「人生の真実」
9. 「裸の人間として」
10. 「戦略的思考」
11. 「行動こそが全て」
12. 「目標があったわけではない」
13. 「小が大に勝つ」
14. 「健康について」
15. 「覚悟を決めた人」
16. 「場が読める人」
17. 「夢より想像力」
18. 「自らの力で乗り越えるまで」
19. 「自分で考える」
20. 「善良な心を持って」
21. 「日々の積み重ね」
22. 「やりたくないことを仕事にする」
23. 「全てのもので楽しめ」
24. 「環境を受け入れる」
25. 「視野を拡げて仕事を見る」
26. 「視野を拡げて人を見る」
27. 「視野を拡げて自分を見る」
28. 「仕事への対し方」
29. 「苦しみは報われる」
30. 「自分の事は横に置いて」
31. 「自分の道」
32. 「志高く」

第1回

「一つの歯車」

今日は！パフのメンバーメールを書かせて頂くことになった國貞です。去年は社会人向けメルマガで「自分らしく生きる」をテーマに書きましたが、今年は「生きる力」をテーマに人生と仕事について考えてゆきたいと思います。

まずは、私の略歴を紹介しておきます。私はもともと技術屋。大学時代は機械工学を勉強し、会社に入って5年程は海外に製鉄所を建設する仕事をしていました。その後、人事部に移り4年ほど採用担当。それから経営企画、MBA 留学、帰国後は海外企業とのM&A（買収・合併）の交渉などを担当し、今から5年前に17年間勤めた会社を辞めました。「自分の足で立って生きてゆきたい」そんな気持ちで独立し、今は中小企業の社長さんの右腕として会社の問題を解決することや、大企業の管理職教育を主な仕事にしています。

では、早速第一話。先日就職セミナーで講演した際「君達は大きな会社に行きたいか、小さな会社に行きたいか」と尋ねたら8割くらいが小さな会社に行きたいと答えた。大きな会社で歯車の一つになるのが嫌だというのだ。立派な目標を持つことは素晴らしいことだ。しかし、歯車の一つになることを嫌がるような人がはたして立派なことができるのだろうか。

僕の最初の仕事は発展途上国に製鉄所を作る仕事だった。何百億円という規模で、何百人という人が関わるプロジェクト。そのプロジェクトに関わる全ての人にそれぞれの役割があった。

発展途上国は日本と違いすぐに部品が調達できるわけではない。有能なエンジニアがすぐに助けに来てくれるわけでもない。一人一人が自分の役割をきっちり果たさなければプロジェクトは完成しない。極端な話しをすればボルト一つ足りないだけで工場は動かないのだ。

僕達は自分自身に与えられた役割を果たすために、多くのことを犠牲にして働いた。契約で定められた完成期日を守るために徹夜をすることも多かった。一緒に働く仲間に迷惑をかけないように一つの歯車になりきろうとした。一つの歯車になりきっている人だけが社会では一人前として認められる。

社会に出れば人にはそれぞれ役割がある。社長も一つの役割に過ぎない。大きな社会の仕組みの中では、大きな会社の社長といえども社会の中の一つの役割を果たす小さな歯車でしかない。

一つの歯車になることは決してつまらないことなんかじゃない。どんな仕事に就こうとも、どんな立場になろうとも、一つの歯車になることこそが生きてゆく上で大切なことだと思う。

以上

（文字数：1,017文字）

第2回

「一長一短」

前回のコラムで、就職セミナーで講演した際「君達は大きな会社に行きたいか、小さな会社に行きたいか」と尋ねたら8割くらいが小さな会社に行きたいと答えたと書いた。殆どの学生が大きな、それも有名な企業を目指しているのだと思っていた僕は結構ビックリすると同時にそれ程までに大企業に魅力を感じなくなっているのかとガッカリした。

大企業の魅力はたくさんある。その第一は個人や小企業では成し遂げられない大きな仕事ができることだ。僕がやっていた海外プラント輸出もそうだ。発展途上国の経済発展のために何百人という人が協力して製鉄所を作る。自動車だって中小企業には作れない。

人間関係の面でもメリットはたくさんある。同期と呼ばれる同じ年度に入社した仲間達だ。同期は一緒によく遊ぶ。苦しい時の相談相手にもなってくれる。同期の連中は一生の付き合いになることが多い。また、大きな会社には人事異動がある。嫌な上司にあたっては暫く我慢すれば次に肌の合う上司とめぐりあうこともある。教育研修制度も福利厚生施設も充実している。

このように書くと大企業の方が全てに渡っていいように思うかもしれないが、そうでもない。中小企業の場合は、大企業以上に新人に対する期待度が高い。重要な仕事を若いうちから任される機会も多い。地域を超えての異動も少ない。自動車は作れなくても、自動車の重要なカギをにぎる部品は特徴ある中小中堅企業が作っている場合が多い。

その中でも、中小企業で働く一番のメリットだと僕が思うのは、社内の体制も整ってなく、研修制度も不備な状態の中で、責任の大きな仕事をやらされることだ。人間は与えられるものが多ければ多いほど、自分で考えたり、自分でつかみとったり、自分の力で生きてゆこうとしたりする力が弱まってくる。

私の知り合いの社長さんで、娘さんを高校から一人アメリカに行かせた方がおられる。彼女は15歳で一人アメリカにほうり出され大変な苦勞をされただろう。だが、その苦勞を乗り越えアメリカで大学まで卒業してみると、日本でお決まりのルートに乗って大学を卒業した人達と比べれば、それはもう比較にならない程の「生きる力」の差がある。

大企業の魅力も捨てがたいが、たくましく生きてゆく力を身につけようと思えば中小企業の方に分があるように思える。

全てのことには一長一短がある。選ぶのはあなた自身だ。

以上

(文字数：973文字)

第3回

「想いと直感で歩む人生」

僕は今から 15 年程前に人事部の採用担当者だった。久しぶりに就職・採用という世界に戻ってきたら「自己分析」→「やりたい事探し」という就職活動のパターンが出来上がっていた。今の就職活動をしている学生を見て胸を痛めるのは、「自分とは何か」といった深遠な問いの前で行き詰まり、「やりたいことが分からないから就職しない」と言う学生が多いことだ。

確かに自己分析して自分の進むべき方向が明確になったという人もいる。この方法が自分に合う人はそうすればよい。しかし、人生の選択は何も自己分析からスタートすることが全てではない。

企業の戦略策定の方法もハード型とソフト型のアプローチがある。ハード型は分析先行のやり方だ。市場の機会と自社の強みを分析して進むべき方向を決めるという手法である。一方、ソフト型は人間の想いや直感といったものを重視するやり方だ。

僕は戦略策定においてもソフト型のアプローチが好きだ。就職活動でも自己分析などしたことがない。5 年程前に試しにある会社の手法で自己分析をしてみた。「コツコツ型の慎重派で経理部門などが合っている」という結果が出た。クソ食らえだ！どんなに自分に合っていようがそんな診断結果に従った人生など送りたくない。

社会人になってからずっと僕は海外との仕事をしてきた。英語は中学の頃から大嫌いだった。偏差値も極端に低かった。それでも僕は世界を相手に仕事をしたかった。向いていようがいまいが関係なかった。

自己分析をしてやりたい事を探すことに違和感がある人には、まずは自分の価値観を整理することを薦める。製造業かサービス業か、衣食住のどの業界に居たいか、業界トップ企業か挑戦する会社か、大企業か中小企業か、公務員か民間か、大都市か地方か。それも分析などする必要はない。あなた自身の好き嫌い、直感で決めてゆけばいい。ただ、多くの人のお話を聞くことだけは薦める。人の話を聞くと自分の持っていた勝手なイメージが実態とかけ離れていることに気づくだろう。

やりたいことが見つからないから就職しないなんて愚の骨頂だ。仕事なんて実際にやってみないと本当に所は分からない。自己分析をして希望の会社に入った人ほど辞めたいという人が多い。何でもいいから取り敢えず職に就くことが大切だ。所詮 20 代は一人前になる修行の期間でしかない。実際に仕事をやってみてからやりたいことを探しても遅くはないと思う。

以上

(文字数：990 字)

第4回

「もしそれがやりたい仕事でなかったら」

前回、やりたいことを探すより、何でもいいから先ず職に就くことが大切だと書いた。やりたいことが明確でなくても採用してくれる会社はたくさんある。私が人事部時代に採用した学生は、私がいた会社の「人」にひかれて入社を希望してくれた人が殆どだった。

面接をしていても、無理やりに「やりたいこと」をひねりだしている人より、「私は仕事を通して成長し、世の中の役に立てる人間になって親を楽にしてあげたい」てなことを言う子の方がはるかに魅力的な場合が多い。

やりたいことが明確ではないわけだから、仕事を始めてみるとそれがやりたくない仕事であることは多い。だが、しっかり自己分析をし、やりたい事を明確にして入社してみても、学生の頃思い描いていた仕事と実際の仕事とは大きな隔たりがあるのが普通だ。

もし、あなたが選んだ仕事がやりたくない仕事だったらどうするか。僕自身も今まで何度かそのような状況に直面してきた。技術屋から人事部に移った時は正にそうだった。「海外プラントの仕事をするためにこの会社を選んだのに、何でもこの会社にでもある人事の仕事なんかしなけりゃならないんだ」と思ったものだ。

しかし、その嫌な仕事を辛抱して続け、周りに認められる成果が出せるようになれば、その嫌だと思っていた仕事が楽しくなる瞬間が必ずくる。人事部での僕の最初の仕事は会社案内や会社紹介ビデオを作る仕事だった。その頃、私が作る学生向けの会社案内の原稿を書いていたのが、まだ有名になる前の田口ランディだった。「コンセント」などで直木賞候補にもなった作家だ。「コンセント」の中に國貞という名のスケベ心理学者が登場するが、それは間違いなく私の名前からとったものだ。

話が脱線したが、僕は採用主担当として1,000名を超える社内リクルーターを動かす仕組みを作った。大企業といえども、社内で1,000人の人間が携わるプロジェクトなどそうざらにあるものではない。

振り返ってみれば、あんなに嫌だった人事の仕事が自分の人生の中では、自分の視野を広げてくれる貴重な経験になった。

仕事は楽しいことばかりではない。嫌な仕事をしなければならない時、苦しい場面に直面した時、そんな時に人間は磨かれるのだと思う。

やりたい仕事ができることが幸せに通じる。人生はそんな単純なものではない。やりたくない仕事の結果的に人を幸せにしてくれることの方が多いうような気がする。

以上

(文字数：993字)

第5回

「向き不向き」

今から10年程前、2年間の留学生生活を終えて日本に帰ってきた時に一番驚いたのは、女子生徒が皆ルーズソックスをはいていたことだった。日本人は「自分らしく生きたい」などと言いながら、やることは回りの人と同じことばかりだ。

就職でも、「自分に向いた仕事を選べ」と言われれば、疑いもなく皆がそうしようとする。確かに人間には個性があり向き不向きがあるから、自分の強みを活かして仕事をした方がよいと思う。しかし、多くの人は自分の強みなど分かってはいない。ましてや仕事もしたことがない人がどんな仕事が自分に向くかなど知るよしもないのだ。

「私は人と接することが好きなので旅行代理店で働きたい」という女学生に会うことが多い。ところが、旅行代理店の従業員に我々顧客が期待するのは、愛想の良さなどではなく、多くの旅行商品のどのプランが割安で、どのプランのオプションが充実しているかなど、旅行プランの詳細な情報なのである。そのような情報を提供してくれるのは、多くの場合愛想のいい人より、少し暗い感じはするがきっちり仕事をする人だ。

「税務の仕事が大好きな税理士さんは困りものだ」という話しも多くの社長さんから聞く。税務の仕事が好きな税理士さんはよく勉強しすぐに講釈を始める。しかし、社長は税理士の講釈など聞きたくないのだ。自分の好きなことばかりしている人は、いつも自分中心で相手の立場で物が考えられない人が多いような気がする。

一方、どの業界でも営業でトップの成績を上げている人は、一般的に営業向きと言われる、明るくてよくしゃべるタイプとは正反対の人の場合が多い。少し暗めであまりしゃべらないタイプの人が、顧客の話しをとことん聞き、大きな信頼を勝ち得ている。

また、自分が好きでない仕事をした場合に素晴らしいビジネスモデルを生み出す場合もある。部品のカatalog注文で一躍有名企業になったミスミという会社の前社長は、営業が嫌いだったから営業しなくても注文がとれるカatalog製作を思いつき、ミスミを超優良企業にしてしまった。

仕事をする前から自分の向き不向きなどにあまり深刻になる必要はない。不向きな分野でこそ工夫が生まれ、自分の気付かなかった才能を活かして大きな成功をおさめる場合もある。自分の向き不向きなどは仕事をやってゆくうちに分かってゆくものであり、人は放っておいても自然と自分に向いている方向に進んでゆくものだと思う。

以上

(文字数：992字)

第6回

「自分探し」

「自分らしく生きる」は私にとっての大きなテーマだ。英語で言えば、I really am.とか Live my own life.とかということになるのだろうか。「本当の私」を探したり、「自分独自の人生を送りたい」と思っている人は多いと思う。

大人になっても「自分探しの旅」に出たりする人もいる。しかし、自分の部屋に閉じこもったり、ひなびた温泉宿に行って「自分とは何か」などと考えたりしても、自分が何であるかの答えを見つけるのは難しいであろう。

哲学の分野でも「私とは何であるか」は昔から大きなテーマであった。ヘーゲルは『私は私だ』という意識は、実は他者との関係の中ではじめて実現される」と言っている。唯幻論で有名な岸田秀も、「セルフ・イメージは他者との関係性の中で安定する」と言っている。

例えば、「自分は積極的だ」と自己認識するのは自由だが、それは自分が他者にどう思われたいかという自分の思いに過ぎず、本当にその人が積極的かどうかは、他者が認めてくれてはじめてそれが客観化され安定するというのだ。

研修などで、行動分析とか性格分析とかの診断テストをよく使う。人は、その結果が数字で出てきたりするものだから客観的な結果だと思い勝ちだが、設問への回答が自己申告である以上、その結果は自己の主観的な思い込みの強さが数字になっただけのことなのである。

行動分析で「人間関係が得意」という結果が出てくる人を見ると、その人が「人間関係が得意だ」と自分で思っているだけで、実は回りから見ればその人は人間関係に鈍感で、自分が回りから浮いていることにさえ気づいていない場合も多い。

本当の自分らしさは、他人という鏡を映してでしか分からないものであり、他者や社会との関わりの中から発見してゆくものだと思う。

そういう意味で、自己分析は「自分探し」の旅ではなく、「関係探し」の旅であるべきだ。内にこもって自分を見つめるのもよいが、是非外に出て、友達・親兄弟・先輩・企業の人達といっぱい話しをしてもらいたい。

そして、「自分らしく生きる」というテーマの先にある皆さんの次なる大きなテーマは「生きる意味」ではないだろうか。アウシュビッツ強制収容所から奇跡的に生還した精神分析医フランク博士は、かの有名な彼の著書「夜と霧」の中で「人生の本当の意味は、自分の内面に閉じているのではなく、社会とのかかわりをとおして見つかるものだ。」と述べている。

以上

(文字数：996字)

第7回

「2 : 6 : 2の法則」

かなりの数の人間集団の中では、集団が2 : 6 : 2に分かれるという法則がある。優秀な人が2割と普通の人が6割、ダメな人が2割だというのだ。この法則の面白い所は下の2割を排除しても残った人達がまた2 : 6 : 2に分かれるという点だ。

組織というのは全てが管理職で構成される訳ではない。管理職も必要だし兵隊も必要なのだ。つまり組織の中には組織を引っ張ってゆく人間と引っ張られてゆかれる人間が出てくる。

組織を引っ張って行く側の立場になれば、期待も大きし情報も集まる。重要な仕事の経験もたくさんできる。人は経験によって磨かれるので、上の2割に入る人はどんどん成長してゆく。一方下の2割に入らざるを得ない人達は、本人の持っている能力とは関係なく、期待も情報も重要な仕事も少なくなり、次第に自信さえ失われてゆく。

超有名企業で下の2割に入っている人達と、そうでない会社で上の2割に入っている人を比べると、後者の方が生き活きとしているし迫力がある場合が多い。学歴や頭の良さは、超有名企業の下の方の人達の方が上だったかもしれないが、社会に出てからの周りからの期待や経験といった環境が人を大きく変えてゆくのだろう。

有名企業や大企業に入ることがゴールのように思っている人達がいる。有名企業に入ることが自分のステータスを高めてくれていた時代も確かにあった。しかし、有名企業や大企業に入っても、あなた自身の価値は何ら変わらないのだ。

就職することは社会人としてのスタートにしか過ぎない。有名企業や大企業に入ることがあなたの人生の幸福を約束してくれるものではないのだ。逆にラッキーで入った会社で落ちこぼれ、みじめな人生を送る例はたくさんある。

仕事から中小企業の社長さんと会う機会が多い。彼らの多くは皆ゼロからスタートしている。飲食業のウェーターから仕事を始めた人も、力さえあれば周りが放っておかない。間もなく店長になり、そして独立。レストラン経営から次は店舗設計に興味を持って店舗設計の会社を作り成功し、更にはマンション設計や地域開発にまで事業が広がり、今やかなりの規模のデベロッパーになっている人もいる。

有名な会社に入ることがあなたを幸せしてくれるのではない。就職先を決めるにあたっては、あなたが期待され、活かされ、能力が磨かれ、本当にあなた自身が生き活きと生きていけそうな組織を選ぶという視点も大切なのではないだろうか。

以上

(文字数 : 992 字)

第8回

「人生の真実」

年末に「ALWAYS三丁目の夕日」という映画を見た。昭和30年代を舞台に、物質的には豊かではなかったが、心の豊かさに満ち溢れた懐かしい時代を描いた作品である。

この映画には、心の豊かさだけでなく、人生の真実がたくさん描かれていた。堀北真希（日テレの「野ブタ。をプロデュース」の野ブタ役）扮する六子は青森からの集団就職で東京に出てきて、自動車修理工場鈴木オートに勤めることになる。大きなビルを持つ自動車会社での勤務を夢見ていた六子は、街のオンボロ自動車修理工場が自分の就職先であることを知り愕然とする。

ある日、社長と口論になり「もうお前なんかいらぬ。田舎に帰れ！」と社長に怒鳴られる。その時、六子は「私に帰る所はない」とつぶやく。六子が就職のために家を出る時、六子の母親は「これで口減らしができる」と冷たく六子を追い出した。六子が何度母親に手紙を書いても返事一つこない。

六子のお母さんが冷たく娘を追い出し、六子に手紙も出さなかったのは六子に里心がつかないよとの親心だったのだ。どんな仕事をしようともそこには必ず辛いことがある。嫌になることがある。しかし、それを乗り越えなければ人は一人前になれないし、本当の意味で仕事を楽しむ所まではたどりつけない。

そんなことは真剣に生きてきた大人なら誰だって知っている真実だ。今の時代でも、やりたいことを見つけて入ったはずの会社が、自分の思っていたこととは違うことばかりだと殆どの人を感じていると思う。それはどんな会社に入っても同じだ。しかし、そこを乗り越えなくてはどこの会社にいても同じなのだ。問題は会社にあるのではなく、それを乗り越えようとしない自分の側にある。

「自分に合った仕事を見つけなさい」「やりたい仕事をやりなさい」皆がそう言う。決して間違いではない。しかし、その考えは人に間違った人生を歩ませる危険性をはらんでいると思う。人間が本当に力を出す時は追い込まれた時だ。追い込まれた時どのように動くかがその人の人生を決めてゆく。

僕は自分の子供達を社会に送り出す時、この六子のお母さんのように厳しくなれるだろうか。このお母さんのように本当の優しさで子供達に接することができるだろうか。人生の真実を背中で伝えることができるだろうか。

人生の真実はチャラチャラした言葉の中にはない。自分の人生を自分の力でつかみ取る逞しさを持った人間になってもらいたいと思う。

以上

(文字数：998字)

第9回

「裸の人間として」

僕が17年勤めた会社を辞めたのは米国へのMBA留学がきっかけだった。留学で価値観が180度変わってしまった。留学時代のアメリカ人同級生で優秀なヤツは起業していった。そして一番つまらない人達が大企業に就職した。留学する前は一部上場企業に勤めていることを心のどかで誇りに思っていた。しかし、留学してからは、自らリスクを背負い新しいことに挑戦していく人こそが本当に価値のある人間だと思うようになった。

先日、留学時代の日本人の後輩に会った。都市銀行を辞めて小料理屋を始めたのだと言う。彼はエリート中のエリートで頭も良くエネルギーもあり人柄も良かった。その彼が約束された将来を捨てて1,500万円の借金を抱えて小料理屋を始めた。自ら現場に身を置き、一から事業を始め経営がやりたいのだと言う。

留学時代、料理好きだった彼に手料理の食事をご馳走になったことがある。料理もスポーツも勉強も全てにおいて秀でた才能があり、いつも自信満々の笑みをたたえ、常に話題の中心に居るような男だった。その彼が初めて商売としてお客様に料理を出す時、包丁を握った手が震え、お勘定の時には自信がなくて「5,400円です。」となかなか言い出だせなかったのだそうだ。

素晴らしい経験をしているなと思った。多くの人はどこかの企業に所属して給料をもらっている。しかし、企業に勤めず、一人の裸の人間として縁もゆかりもない人から5,400円をもらえる人が何人いるだろうか。5,400円を組織から給料としてもらうのと、自分の力で稼ぎ出すのでは雲泥の差がある。「自分は給料以上の仕事をしている」と自慢げに言う人が多いが、それは会社のブランドや組織としての安心感、そして先輩達が作ってくれた実績や信頼のおかげである場合が多い。

本当に力のある人というのは、一人の裸の人間として信頼を得ることができる人だと思う。組織から離れ何も後ろ盾がなくなっても、お客様から「あんたになら任せよう」と言ってもらえる人だ。

組織の中にも、ビジネスは最終的に裸の人間の対一の勝負になることが殆どだ。その時大切になるのは、その人がどんな人生を送ってきたかということだ。深い人間理解があるか。人への思い遣りはあるか。苦しい時に逃げないか。何か譲れない信念のようなものを持っているか。そんなことが最終の判断基準になるのだと思う。

裸の人間として堂々と歩いてゆける人になりたいものだ。

以上

(文字数：999字)

第10回

「戦略的思考」

仕事柄、多くの人が組織の中で生き活きと働けるようにするにはどうしたらよいかといつも考えている。仕事で成果の出せない子が「大変なことが多いけれど好きな仕事だからいいんです」と言うのを聞くことがよくある。直感的に「この子は自分にうそをついているな」と思い心が痛む。「大変なことが多いけれど自分の選んだ道ですから」と言ってくれた方がまだ希望が持てる。

企業の管理職の最も大切な役割は、部下の「やる気」と「能力」を高めることである。「やる気」と「能力」は企業の業績にも大きな影響を与えるし、何より本人の仕事に対する幸せ感のベースになるものだ。日本人は精神論が好きだから「やる気があれば何でもできる」と言う人が多い。ウソではないだろう。しかし、仕事の能力が低く、成果が出せない人がやる気になることはまれである。そういう意味で、自己の能力を高めることは生き活きと働くうえで極めて大切なことだ。

能力を高めるために、今日は「戦略的思考」について考えてみたい。「この人は戦略的だなあ」と思うビジネスパーソンにちょこちょこ出会う。「戦略的だなあ」と感じる時、僕はそれらの人を「将来を見通し、目的を達成するための手段の優先順位を明確にし、ものまねでない思い切った事をしている人だなあ」と見ているように思う。

戦略的に考えている人はビジョンを持っている。ビジョンとは「将来の構想、将来を見通す力」のことだ。将来を見通す時、先ずは人に焦点を当てて考えるのがよいと思う。なぜなら、商品やサービスを購入できるのは「人」だけなのだから。

人口構成の変化として少子高齢化、人口減少、晩婚化、単身世帯の増加などがほぼ間違いないトレンドだ。人の意識の変化を見れば、心の豊かさ志向、価値観の多様化、余暇活用・レジャー志向、ボランティア活動の活発化、環境・健康志向などは明らかな変化であろう。

このようなマクロの環境変化が、皆さんの業界や市場の変化にも大きな影響を与えていると思う。それら皆さんの業界や市場の変化をビジネスのチャンスとしてとらまえ、どのような手を打てば将来最も大きな効果が期待できるか、また他社がしかけてきそうにない独創的な手段はどのようなものであるかを考えることが戦略的思考の第一歩である。

手当たりしだい突進するのも良いが、物事を分類し、因果関係を押さえ、優先順位を明確にしてゆく戦略的思考の習慣も身につけてもらいたい。

以上

(文字数：994字)

第 11 回

「行動こそが全て」

前回「戦略的思考」について書いたが、戦略的思考を薦めると、机の上で考えてばかりの人が増えるのではないかと危惧している。何も考えずにただひたすらに動き回るのも芸がないが、かといって机の上で考えてばかりでも何も生まれてこない。

私の家の近所に Roland の創業の頃から社長と一緒に会社を作ってこられた方が住んでおられる。Roland といえばプロが使うキーボードで有名な会社だが、私はつい最近まで Roland は外資系の会社だと思っていた。

Roland は日本生まれの日本の会社で、創業社長は街の電気販売店をやっておられた方らしい。Roland の失敗と成功の歴史を書くだけでも学ぶ点はたくさんあるのだが、Roland の創業時代から社長と苦労を共にしてこられた方と話をしている、こんなことを言われた。「國貞さん、ビジネスは先ず行動だ。行動すれば必ず失敗する。失敗して追い込まれた時に人間は知恵を出すのだ」と。全く同感であった。

私は彼の言葉に答えて言った。「そうなんです。行動すれば必ず失敗しますよね。だから大きな行動に出る時は慎重にならざるを得ないんです」と。すると、彼の返事はこうだった。「でもね～、大きな失敗をすれば、それだけ大きな気づきがあるんだよな～。」ビジネスの現場を自分の足で歩いてきた人の発言には重みがある。

経営学にはビジネスで一番大切なポイントが欠落しているように思えてならない。「戦略的思考」「経営戦略論」「ロジカル・シンキング」「クリティカル・シンキング」などカッコイイ題名の本が多数出版されている。しかし、それらは実際に行動に移す前の考え方のフレームワークを提示した本にしか過ぎない。

ビジネスで大切なことは戦略的に考えたことを実行する段階にあると思う。「行動すれば必ず失敗する。」真理であるような気がする。初めから計画通りに事が進んで成功したビジネスなどないのではなかろうか。そして人は失敗し追い込まれた時にたくさんのことを学び大きく成長する。「功業は難中に生まれる」は西郷隆盛の言葉である。

ビジネスの世界で生きてゆくなら、アカデミック・エリートよりストリート・エリートを目指してほしい。仕事の出来る人は皆口をそろえて言う「答えは現場にある」と。失敗を恐れず行動する勇気のある人になってもらいたい。言うのは簡単だが行うのは本当に難しい。

「考えてばかりいると目がくれちゃうよ」 相田みつを

以上

(文字数：996 字)

第12回

「目標があったわけではない」

世の成功理論というものの殆どは「目標を明確にしろ」と書いてある。〇〇大学に合格する、売上高を〇〇億円にするなど、具体的な目標を持つことは人をやる気にさせる。自分の過去を振り返ってみても、何かの成果を上げた時は殆どが目標を持っていた時だ。

しかし、私にはこの明確な目標を持つということがどうもしっくりこない、特にビジネスの場合は。一代で大企業を作り上げた創業者が何人もおられるが、その人達がビジネスを始める時から今の姿を夢見たり、目標にしていたらどうか。

私がお付き合いしている社長さんにも、真空管アンプで世界一になっている人がいる（ちなみにこのアンプの値段は3千5百万円だ）。住宅関連設備のインターネット販売で日本一のサイトを運営している社長さんがいる。他にも独自性を発揮して業容を拡大している社長さんがたくさんいる。

これらの社長さんが、創業当初から大きな夢や目標を持っていたかというところと全くそうではない。真空管アンプで世界一になっている社長さんは、それまでやっていた事業に失敗し、お世話になった先輩からアナログアンプを作ってみないかと言われて始めたに過ぎない。住宅関連設備のインターネット販売で日本一になっている社長さんは、濡れ手に泡のうまい話にだまされ借金を背負い、「これからは地道にやるしかない」と思い、15年程前にウォッシュレットの設置業を始めたのだった。

これらの社長さんが成功している理由は様々だが、どの人も現場を大切にし、一生懸命誠実に働き、顧客の信頼を得ている。また、仕事の様々な場面でアイデアや知恵を絞り、他の人がやっていないことをしている。お客様を大切にし、常にお客様のニーズを満たすと同時に自分のレベルを高める努力をしている。

これらの社長さんのだれもが、今の事業を始めた際に今の状態を目標にしていたわけではない。むしろ、創業の頃抱いていた大きな夢は殆ど失敗に終わっている。夢を捨て、地べたに這いつくばって右往左往している中から、少しずつ成功の元になる知識なり情報なり技術なりを獲得していったのだ。

それら一つひとつの情報や技術は些細なものかもしれないが、それが長い間の経験の中で結びつき花開いたのだ。そして、それらの経験はものまねではなく自分の手と足で掴んできたものであるから価値があるのだ。

大きな目標を持つのも良いが、今日の前にある仕事を大切にしたいものだ。

以上

(文字数：987字)

第13回

「小が大に勝つ」

先日、庭に物置を設置した。広さは一坪ほどで高さは2 m以上ある家庭用としてはかなり大きいものだ。私が買った物置は業界でさほど有名なメーカーのものではなかったが、デザインがシャレていたり、小さな荷物かけ用のフックがついていたり、細かい点に配慮がいき届いている品だなどと思い購入を決めたものだった。

設置作業に来られた方からこんな話を聞いた。「このメーカーの物置は組み立て易いんですよ。ほら、こんな具合に2 mの間隔の縦柱の上に横柱を取り付けようとするとは前は二人いないと作業ができなかった。でもこのメーカーのものはフックがついていて片方を引っ掛けておいて一人でもねじが締められる。こんな工夫が一杯なんですよ。このメーカーの営業マンはよく我々の所に来て『不具合はありませんか』と聞いて帰るんです。実際に不具合が出た場合でもこのメーカーだけはメーカーの人間が直接手直しに来て現場の状況を見て帰る。本当にたいした会社ですよ。」

このメーカーはいずれ業界トップになるだろうと思った。営業マンがこまめに顧客の所を回り顧客とよく話しをし、不具合点が設計に反映される仕組みが出来上がっている。業界の下位にいるからといって打つ手がないわけではない。生きたお手本である。

私は業界の5番目の会社にいた。東南アジアの現地企業との合弁会社設立に関して、我々はフットワークもよく、企画力もあり、合弁交渉先との信頼関係も良好だった。それが最終的には政治的な力によって企業連合が作られていった。その事を叔父に愚痴っていたら、叔父から「お前は仕事に対する取組みが甘い。業界トップが政治力を使ってくるのはあたりまえだ。そんなことも考えずに仕事をしていたのか。業界トップにはトップとしての仕事の楽しさと苦しさがある。業界の下位会社には下位会社なりの楽しさと苦しさがある。仕事の結果を環境のせいにしてしまうようじゃたいした仕事はしてないな。」と言われた。反論の余地もなかった。

孫子の兵法もランチェスター戦略も、小が大に勝つ方法は「一点集中突破」だ。相手の弱みに全エネルギーを集中し突破する。小が大と同じことをして勝てるはずがない。人のやらないこと、人にやれないことをして突き抜けなければ大に勝てるはずなどない。人がやれないことをやる人を見た時、人は心を動かされる。そして、ビジネスを行っているのは詰まるところ心を持った人なのだ。

以上

(文字数：992字)

第14回

「健康について」

生きる力のうちで最も大切なのが「健康」だろう。私は約1年前にブドウ膜炎という原因不明の眼の病気だと診断された。原因不明なので治療法がわからない。対症療法として炎症を抑えるためにステロイドを投与しているが、症状を軽減するだけで病気自体は治らない。逆に、ステロイドの副作用として左眼は白内障になり、右眼は緑内障になりかけている。

原因不明と言われる病気は生活習慣病である場合が多いらしい。私自身、仕事では結構無理をしてきた。夜中の12時前に家に帰ることは殆どなかった。仕事で興奮したまま家に帰るので寝つきが悪く、強い酒をあおって睡眠薬代わりにしていた。事務所に寝袋で泊まりこみ、土日も含めて3ヶ月間1日も休まない。そんなことを誇りにしていた時期もあった。

仕事には際限がない。例えば、技術系新入社員300人の配属先を決める時だ。技術系社員は最初どこに配属されるかで人生が大きく変わる。人事担当者は、本人の希望・専門分野・性格・家族構成など多くの情報を総合して一人ひとりの配属先を決めてゆくが、これが最適というようなものはない。そして、議論を終了させるには「俺達はここまで考えたんだから」という体力の限界を言い訳にするしかなかった。

人事部など人を扱う部門は答えのない仕事ばかりだ。一人前の人事部員になるには胃潰瘍か十二指腸潰瘍の手術をしていなければならないと、まことしやかに語られていた。

しかし、我々は生身の人間である。無理な状況が長く続くわけがない。確かに健康を犠牲にしてでも責任を果たさなければならない時がある。無理をしなければならない時もある。でも、無理を続け健康を害してしまえば元も子もない。

若い人達に健康についての話をすると「長生きしなくていいですから」と言う。私もそう思っている。しかし、君達が当然と思っている君達の機能（眼が見えるとか歩けるとかの機能）が明日から失われ、それが睡眠や食事といった生活習慣と深い関係があるとしたらどう思うだろう。私も自分自身が原因不明の病気になるなどとは思ってもいなかった。

もともと人間は自然から生まれ自然の生き物から生きる力をもらって命を永らえている。自然の営みに従って眠り、新鮮なものを食べる。我々人間の活力の源泉は眠ることと食べることにある。自分達が自然から生じた生命体であることを再認識し、健康の大切さと正しい生活習慣について今一度考えてもらいたい。

以上

(文字数：996字)

第15回

「覚悟を決めた人」

生きる力のうちでも覚悟を決めた人の力ほど清々しいものはない。生きてゆくことは価値あることだと思うが、生きてゆくことは楽しい事ばかりではない。むしろ苦しい事のほうが多い。人間は苦しい状況に直面すると逃げ出そうとする。苦しい状況でなくても、他にもっといい所があるのではないかと目をキョロキョロさせている人が多い。しかし、逃げ場がある人に本当にいい仕事ができるだろうか。

私は管理職研修で、今までどのように自分のモチベーションが変化してきたかを図にしてもらうことがよくある。最近ある宗教法人にお勤めの方のモチベーション曲線を見た。その方のモチベーション曲線は、その宗教法人に勤めだして3年目くらいから極端に高くなっていた。理由を伺うと、それまではこの宗教法人で仕事をしていていいのだろうかという迷いがあったが、3年目にこの宗教法人で生きていこうと覚悟を決められたのだそうだ。

中小企業の社長さん向けの経営研修で、「部下が退職したいと言い出した時」と題して、社長さん同士でロールプレイングをして頂いたことがあった。その時、ある二代目社長さん（とはいってもお歳は70歳位だったが）が、部下役をなかなかやめようとしなない。「もうその辺で結構です」と言って私が話し始めても、その社長さんの組だけがロールプレイングを続けてしまう。

研修が終ってその社長さんが私の所に来られ、「今までたくさんの部下が会社を辞めていった。ロールプレイングではありましたが、私は自分の人生の中で初めて『退職したい』と今日言ったんです。」と涙眼になりながら言われた。

私はこれを聞いて、この社長さんには今まで会社を辞めるなんて事は彼自身の選択肢にはなかった。厳しく苦しい覚悟のもとに経営してこられたんだなと胸が締め付けられる思いであった。同時に、辞められるという選択肢があるだけサラリーマンは気楽なのだと感じたものだった。

覚悟とは「迷いを脱し、真理を悟ること」とある。覚悟を決めた人に迷いはない。そして、本当に大切なことが分かっている。事業がうまくいかなくなっても、あれもこれも失いたくないと思っている社長は迷いだけである。何もかも捨てる覚悟が出来ている人は「従業員だけは守ってもらいたい」と言われ、自分にとって一番大切なものが分かっておられる。

覚悟出来ない人はいつまでたっても迷いの中。覚悟を決めた人は幸せだ。

以上

(文字数：983字)

第16回

「場が読める人」

私は企業の管理職研修をやることが多い。管理職研修で、「ダメは部下の特徴を挙げて下さい」とお願いすると、どこの会社でも次のような答えが返ってくる。

<強み>

- まじめ、言われたことはキッチリやる、自分の得意分野は良く知っている

<弱み>

- 人間関係が作れない、主体的に動けない、場が読めない

これを見て分かることは、いかに適切な家庭教育ができてないかということだ。特に弱みに注目してもらいたい。これらの殆どは遊んだり、手伝いをしたりする中で身につくことばかりである。想像できるのは、遊びも手伝いもせずに「まじめにやりなさい」「塾に行きなさい」と言われ、それをそのまま言われた通りにやって育ててきた子供達の姿である。

この中でも「場が読める」ということは仕事をする上で極めて大切な能力だ。「勤がイイ」とか「気がつく」という言葉と同義かもしれない。スケートの浅田真央選手を指導する山田コーチが「上手くなる選手はどういう選手か？」と聞かれ、「頭がいい子よ。勉強ができるかどうかじゃなくて、コーチが何をしてもらいたいと思っているか、次は何をすべきかが状況をみて分かる子。勤がイイ子よ。」と答えておられた。

仕事も全く同じだと思う。お客様が何を望んでいるか。上司が何をしてほしいと思っているか。職場で自分はどう動くべきか。常に意識が自分以外の所にある人は仕事ができる。逆に自分のことしか考えていない人は、いくら頭が良くてもボーッとした感じがする。

先日、運動部系の学生が主催する就職説明会に参加した。本当によく気がつく子ばかりが集まっていた。懇親会でもビールはついてくれる、食事は取り分けてくれる。カバンは持ってくれる。私はそんなことをしてもらいたいわけではないが、常に自分のことは後回しで、他人の事に意識が向いている子は気持ちがいい。

体育会系は軍隊式で、下級生は奴隷のような扱いを受けることも多い。私自身が学生時代、「こんなことに何の意味があるのか。もっと人間は自由であるべきだ。」と思っていた。しかし、今になって思えば、徹底的に我を捨てさせるのは、意識を他人に向けさせる訓練だったのだろう。そして、それが先人の英知として営々と続けてこられたのだろう。

自分にとっての幸せとは何か、自分は何をやりたいのかなど、いつも人は自分のことばかり考えている。先ず「自分」を捨て去ることが幸せにつながる道ではないかと思ったりする。

以上

(文字数：990字)

第17回

「夢より想像力」

夢を持っている人はいいなと思う。僕も若い頃からやりたいことはたくさんあった。しかし、それは「夢」という感じではなかった。「夢」という言葉は、僕にとっては「自分勝手なもの」という、どちらかというとなイナスのイメージがつきまとう。

映画「ライムライト」の中でチャップリンが「人生に必要なものは、勇気と想像力とほんの少しのお金」というセリフをはく。これは” All it needs is courage, imagination, and a little dough.” の日本語訳だが、人生の中で何が大切であるかがよくわかっている人の言葉だと思う。

「夢」 ” Dream” ではなく、「想像力」 ” imagination” である所が良い。「夢」と言われると「自分がこうなって幸せになりたい」という自己本位のイメージだが、「想像力」は「世の中や社会や人間関係がこうなれば理想だ」というような、自分以外のことを対象に理想像に想いを巡らしているように感じるのだ。

僕は昔から「目標」とか「競争」とかいう世界に何か違和感を抱きながら生きてきたというのが本心だ。人間の欲をむりやり刺激して商品やサービスを開発し、人類の幸福を求めてきたなれの果てが、今の環境破壊と不健康な世の姿だとも言える。このまま人間の欲を満たす商業活動を続けてゆけば、私達の子供や孫の世代はどうなってしまうのだろうと心配になる。

いつの世も若者が時代の変化に一番敏感だ。競争社会の価値観の中を生き抜いてきた「おやじ」達から見れば、今の若い人達は「甘い」ということになるのだろうが、競争社会の弊害や、自分の利益ばかりを追い求めて不祥事を起こし続ける今の大人達を見て、若者は幻滅しているのではなかろうか。

今の若者が全てに意欲や興味を失ってしまったわけではない。それが証拠に阪神大震災の時、多くの若者がボランティアとして立ち上がり行動した。若者達は、今の「おやじ」達が大切にしてきたものより、人間としてもっと大切なものを求めているように思えてならない。

「おやじ」の一人である僕が言うのもおかしいが、今の日本の社会は問題だらけだ。努力もしない者が既得権益や政府の保護のもとに安住し、弱い者いじめをしている。今のでたらめな社会に怒りを持ち、君たちの理想像を熱く語ってもらいたい。そして少しでも何かを変えてゆくために行動を起こす勇気を持ってもらいたいと思う。

以上

(文字数：985字)

第18回

「自らの力で乗り越えるまで」

前は少し書生っぽいことを書いてしまった。有名な調教師である藤澤和雄さんが彼の著書「競走馬私論」の中でこんな言葉を紹介している。「夢なんてものはな、寝ぼけた奴が見るもんだ。バカなことを考えずに、ちゃんと地面に足を着けて働け。」これは藤澤さんが一流の調教師になるためにイギリスに留学をしたいと言った時、彼のお父さんから言われた言葉だ。家族を抱え、牧場を抱え、たくさんの責任を背負い、地に足を着けて生きている人の言葉は重い。

君たちのお父さんやお母さんだっ、生きるためそして君たちを幸せにするためにいろんなことを我慢して働いてこられたはずだ。意見の違う上司、立場の違うお客様、仕事をしていて100%自分の思い通りになることなんてありゃしない。皆それなりに自分を殺し辛抱しながら、かといって全てに流されるわけではなく、自分と他人の間のバランスをとりながら生きている。夢や理想がなくても生きるために一生懸命な人は素晴らしい。

この前喫茶店に入っていたら、となりに座っていた若い女の子が「私って、何にもものめり込めないのよね〜」なんて話しをしていた。私は、この子達は一生何かに打ち込むことはないだろうなと思った。のめり込めるものはどこからか降ってくるわけではない。のめり込めるようになるまで続けられるかどうかだけだ。

外から見て面白そうな仕事でも、仕事がすぐに楽しくなるわけではない。むしろ面白くないことばかりが続く。だから皆途中でやめてしまう。その面白くない状態を辛抱して続け、自分で何かをつかみ取る所までいかないと仕事は楽しくならない。

私の経験から言えば、どんな苦しい状況もいつかふっと新しい世界が開けるように楽しくなる瞬間がくる。全く英語が聞き取れない状況で留学した時、ネイティブの人の英語が聞きとれるようになるまで半年かかった。技術屋から事務屋に転向し、事務屋の仕事に自信が持てるようになるまでに3年かかった。サラリーマンを辞め、自分の仕事を見つけ、仕事を楽しめるようになるまでには4年かかった。

今大卒の3割が入社3年以内に会社を辞めてしまうらしい。人の能力は経験に比例して伸びてゆくものではない。苦しい時期を乗り越えて一皮向けた時に、ドンと人は成長するのだ。自分探しとかオンリーワンの自分とか、キレイごとを言ってみても、実力が伴わなければ意味がない。職を転々としていて腹の据わった人間になれるはずがない。

以上

(文字数：998字)

第19回

「自分で考える」

以前「場が読める人」というタイトルで「我を捨てなさい」と書いた。しかし、自分を見失って闇雲に人の言うことに従うようになれば困りものだ。素直な心を持つと同時にしっかりした自分の考えを持ってもらいたい。しっかりした自分の考えを持つことはこれから皆さんが自分の人生を生きて行く上で極めて大切なことだ。人の言われるままに考えを変えるような人間ではだれにも相手にされない。

何か問題に直面すると「どうしたらいいのですか？」とすぐに答えを聞こうとする人が多い。マニュアルやノウハウ本に頼ってきた人達だ。現実社会は複雑系だから正しい答えなどない。例えば、あなたがお客様との関係で悩んでいたとする。「私ならこうする」というアドバイスはできても、それをそのまま実行してもたぶんうまくいかないだろう。なぜなら、あなたと私は、経験も能力も性格も、全てが異なる人間だからだ。結局、あなたが抱えている問題はあなた自身で考えて答えを出すしかない。

何か新しいことを企画する時も、参考例をひたすら研究し、事例の最大公約数が「答え」というような企画をする人が多いが、そんな企画では人を魅了できない。もちろん事例や専門家の考えを参考にすることは大切だ。ニュートンが万有引力の法則を発見した時「私は先輩の肩に乗ってりんごが落ちるのを見たから万有引力の法則に気がついたのだ」と言ったという。先輩方の知恵の集積をベースにして更にその次を考えるから新しいものが生まれてくる。諸先輩から学ぶ素直さは必要だ。

同時に、まずは自分で考えぬくことが大切だと思う。自分の経験と考えに基づいた自分独自の考え方だから価値があるのだ。自分の腹の底から出てくる自分の言葉でなければ重みがない。もちろん、独善的になるのはよくないが、人の意見や考えをただまとめただけでは意味がない。

世の中の常識と言われるものも正しいことばかりではない。「地位の高い人は立派な人だ」「大企業に就職したり公務員になれば生活が安定する」「金持ちは幸せだ」どれが正しいか？高い地位でなくても立派な人はたくさんいる。本当に生活が安定するのはその人自身に生きる力がある場合だ。金を持ったがために不幸になっていく人は多い。世の常識に惑わされず、あなた自身で何が正しいのか何に価値があるのかを考えてもらいたい。

素直な心を持つと当時にしっかりした自分の考えを持つことが大切だと思う。

以上

(文字数：989字)

第20回

「善良な心を持って」

最近、中学生の息子が世の中に興味を持ち出し、ビジネスに関する本を読み漁るようになってきた。彼が読んでいるのは、「成功するために何をすべきか」とか「金持ちになるためには何が大切か」とかが書いてある本だ。それらの本には、「目標を明確にせよ」とか「人の縁を大事にしろ」とか「ものごとを戦略的に考えよ」とかが書いてある。あながち間違いでもないので、読みたいように読ませている。

しかし、親として本当に学んでもらいたいのは金持ちになる方法などではない。彼に期待することは「金持ちになること」ではなく「世のため人のために役立つ人になってほしい」ということだ。人が学ぶべきことはたくさんあるが、最も大切なことは「人間として立派な精神性」を学ぶことだと私は思っている。

日本人は昔から学ぶことを大切にしてきた。学校制度がない江戸時代でも多くの寺子屋があった。寺子屋では、読み・書き・そろばんが教えられていた。生きるための基本的なスキルであり大切なことだ。寺子屋とは別に高等教育機関としての藩校があった。藩校での学問は儒教が中心であり、ここで教えられていたのは「人の道」である。つまり、「人として何が正しいのか」ということだ。私が理解する所の「人として正しい道」とは「善良な心を持って行動する」ことだと思っている。善良なる心を持って行動する人は立派な人となる。善良なる心を持って行動する企業は繁栄する。

日本のビジネスの源流の一つが近江商人だと言われている。近江商人の基本理念に「三方よし」という言葉がある。「三方よし」とは「売り手よし、買い手よし、世間よし」のことで、商売とは売り手と買い手の関係が円滑であり且つ世間の人々に喜ばれる活動でなければならないとする考え方だ。近江商人は、自社の利益より先ずお客様のことを考え、利益が上がれば学校建設・道路改修・治山治水事業などに莫大なお金を寄付している。近江商人の血を受け継いでいる企業としては、百貨店の高島屋や大丸、商社の伊藤忠商事や丸紅などがある。300年前の近江商人の善良なる商売理念が、現在のビッグビジネスを生んだと言える。

自分のことだけを考えて金持ちになることを目指すのではなく、世のため人のためになることを考えて、真の意味での人生の成功者になってもらいたい。

「人の成功は自分に克つにあり、失敗は自分を愛するにある。」西郷隆盛

以上

(文字数：979字)

第 21 回

「日々の積み重ね」

退職してからしばらく大学生の就職アドバイスを仕事にしていたことがあった。私は機械設計、企画、営業などの様々な職種を経験し、大企業も中小企業も知っており、人事部で採用の経験もあった。「仕事はどれも同じ。仕事は課題解決であり、全ての仕事は人を通して行われる」ということを言い出したのもその頃だ。いろんな仕事をやってきた私の実感だった。

学生に世の中の本当のことを伝えるために、もう一つ言っていたことは、「学生の評価はその人と話す前からおこなった分かっている。少なくとも3分も話せば○か×かの判断はつく」ということだった。

その頃私を使ってくれていた社長さんから、「國貞さんは学生の立場に立っていない。そんな事を言われて学生はどう思うか。学生に希望を持たせ、志望する会社に就職できるようにしてあげるのが就職アドバイザーの仕事ではないか」と言われ、猛反省したことがある。確かにそうだ。

私だって学生に直接会えば「この目の前の子供達をどうにかしてあげたい」とは思う。ただ、毎日何も考えずにテレビゲームばかりしてきた人が、就職試験前にスキルやノウハウを身につけても結局ダメなのだ。

人事部の人が見ようとしているのは裸の人間だ。就職活動のスキルやノウハウを身につけていればいるほど、それを剥がして本当のその人を見ようとする。就職試験前に身につけたスキルやノウハウより、今までその人が何を考えどう行動してきたかのほうが数段大切だ。そして、それら日々の考え方や行動は、目つきや立ち居振る舞いに現れてくる。

付け焼刃のスキルやノウハウでいっとき成功するより、失敗して日々の行動の積み重ねがいかに大切かを知ることの方が大切だと思う。就職試験だけではない。これから皆さんがマネージャとして人を使う時も同じだ。スキルとノウハウで部下の心をつかむことなど出来ない。大切なのは人間性や人格だ。

娘と一緒に、構造計算の偽装問題に関する証人喚問を見ていて、娘が「悪いことをする人は顔も悪いね」と言った後「あの人はいい顔しているの・・・」とつぶやいた。その人は、偽装を最初に見破った人だった。人の考え方や日々の行動は40歳にもなれば顔に現れ、それは小学生にでも見抜かれるのだ。

善良な志を持って日々の仕事に取り組んでもらいたい。日々の考え方や行動が皆さんの人格を作ってゆく。仕事を通して世のため人のためになることを黙々と続けてゆくことが大切だと思う。

以上

(文字数：999字)

第22回

「やりたくないことを仕事にする」

私は15年前に採用担当をやった頃から一貫して若い子達に言っていることがある。それは「3年くらいで会社を辞めるな。でも10年経ったら会社を辞められる人間になっておけ。」という言葉だ。

最近「やりたいこと」という言葉がどうも気になる。やりたいことさえやれば幸せになれるのだろうか。私の経験からいって、やりたいことをやると幻滅することが多いような気がする。私は学生時代、海外に製鉄所や発電所などを作るプラント輸出という仕事を通して、発展途上国と日本が共にハッピーになる仕事をしたかった。幸運にもその「やりたい仕事」に就くことができたが、そこで味わったのは、発展途上国と日本の同時ハッピーばかりではなかった。

発展途上国はお金がない。プラント輸出もビジネスだから受注競争がある。受注するためにはコストを抑えなければならぬ。結果として、一日中人間が手押しで潤滑油を補給する機械を納めなければならない時があった。プロジェクトマネジャーに「この機械は非人道的だ」と訴えたら、「顧客は納得している。彼らには金がない。我々も赤字はだせない。どうしても自動給脂装置を納入したいのならお前がポケットマネーで買ってあげたらどうだ」と言われた。その装置はとてもポケットマネーで買えるようなものではなかった。ビジネスは理想論だけでは片付かないのだ。

会社を辞めて事業に失敗し、今は経営コンサルと研修講師という仕事をしている。会社を辞めた時、経営コンサルや研修講師のような仕事だけはやりたくないと思っていた。しかし、生きてゆけなくなり、あるご縁もあって「やりたくないこと」を仕事にした。

「やりたくないこと」だったから普通にやってはいられない。やるからには自分で意義ある仕事にしなければならない。明確な成果を出し、特別高い評価を受けなければ、自分の存在意義がなくなる。

そんな思いで「やりたくないこと」をやると、勉強することが一杯あることに気づく。人の真似事ごとではなく、仕事に突っ込んでゆき、本質にせまり、お客様に喜んでもらわなければならない。そうやって仕事をしていると「やはり仕事はどれも同じだな」と思うようになってくる。「やりたくないこと」の中にも面白いこともたくさん出てくる。

仕事をする上で所詮20代は修行の時代でしかない。あまり「やりたいこと」を考えるより、仕事の中に面白いことを発見する術を学んだ方がいいと思う。

以上

(文字数：993字)

第23回

「全てのものを楽しめ」

ある方からニューヨーク大学リハビリテーション研究所に掲げてある碑文を紹介頂いた。「病める人の信条」を題されたものだが、これは病める人だけのものではない。紙面の関係で全文紹介できないが、まずは原文を味わって頂きたい。

I asked God for strength, that I might achieve
I was made weak, that I might learn humbly to obey
I asked for health, that I might do greater things
I was given infirmity, that I might do better things
I asked for riches, that I might be happy
I was given poverty, that I might be wise
I asked for power, that I might have the praise of men
I was give weakness, that I might feel the need of God
I asked for all things, that I might enjoy life
I was given life, that I might enjoy all things

この英文には三好正堂先生の格式高い名訳があるが、一般の人にも役立つように訳せば次のような意味であろうか。

何かを成し遂げようと天に強さを求めたが、謙虚に従うことを学べと弱さを与えられた
大きな事をしようと健康を求めたが、良い事をせよと虚弱を与えられた
幸せになろうと富を求めたが、賢明であれと貧困を与えられた
称賛を得ようと力を求めたが、大いなるものにひざまづけと弱さを与えられた
人生を楽しもうと全てのものを求めたが、全てのものを楽しめと人生を与えられた

素晴らしいメッセージだ。何かを成し遂げるのに必要なのは強さでなく、謙譲や優しさや敬意であったりする。富がなくても心の持ち方次第で我々は幸せになれる。我々は幸せになろうと多くのものを求めるが、実は幸せは既に我々の身近にある。

物事自体に良し悪しや幸不幸や白黒があるわけではない。我々が物事をどう見るかによってその性質が変わってくるのだ。価値のある仕事と価値のない仕事があるわけではない。人が仕事を価値あるものにするか、そうでないものにするかなのだ。そういう意味で、幸せは、その人が物事をどのようにとらまえ、いかに行動するかによって決まるのだと思う。

以上

(文字数：992字)

第24回

「環境を受け入れる」

娘が中学校に入学した。小学校時代は元気一杯だったのに最近ひどく元気がない。元気がなくなった原因は凡そ推測がついている。小学校時代に仲の良かった4～5名の友達とずっと一緒にいれると思っていたのが、娘だけがクラスが別で一人ぼっちになってしまったのだ。可愛そうだけど見守るしかない。彼女自身が環境を受け入れ、自ら問題を解決してゆくしない。先日娘に次のようなメールを送った。

「幸せはいつも自分の心がきめる」という言葉、覚えてる？相田みつをの言葉だけど、公子には今この言葉が必要だと思います。中学に進学して友達がいなくなり、中学を面白くない所と思っている人もいれば、「新しい友達をどんどん作るぞ」と希望に満ちている人もいます。同じ中学校なの입니다。

楽しい小学校時代は終わりました。公子自身が新しい環境を受け入れ、自分から前向きに生きていけるかどうかが大切だと思います。公子が感動した「1リットルの涙」の亜也は、公子よりもっと厳しい環境を受け入れたから、あんなにたくましく生きていけたのです。明るく元気な公子に戻ることを楽しみに待っています。

私が大学に入学した時もそうだった。私が通った高校は普通科ではあったが大学に進学する人の方が少ないような高校だった。そんな中から東北大学に合格したので、鼻高々で杜の都仙台に向かった。同じアパートの住人になった二人の同級生は東京の名門高校出身だった。彼らにとって東北大学は二流大学であり、「都落ち」のような敗北感の中で仙台に来ていた。

新しく社会人のなった人の中にも、就職した会社になじめなかったり幻滅したりしている人が多いのではないかと思います。希望していた仕事につけなかった人もいるだろうし、面接で会った人事部の人は素晴らしかったに現場に出るとつまらない人ばかりだと思っている人もいるかもしれない。しかし、それが現実なのだ。あなたが会社に過度の期待をしていただけで、会社自体はそんなに素晴らしい所でもなければ、素敵な人達ばかりがいる所でもない。

幻滅して転職するという選択肢もあるが、まずは今いる環境を受け入れてもらいたいと思う。環境自体は実は○で×でもない。その環境を受け入れ、その中でそれを○にするか×にするかは、皆さんしだいなのだ。環境を受け入れることが出来れば必ず人生は広がる。前回のコラム「全てのものを楽しめ」の意味が分かってもらえたらどうか。

以上

(文字数：991字)

第25回

「視野を拡げて仕事を見る」

5月になると多くの新人がやる気を失ってくる。五月病だ。私はインターネットで竹とんぼ教材を販売している。もし、あなたが私の会社の営業マンとして採用され、竹とんぼ教材の販売を担当し全国を売りまわっているとしたら今頃どんなことを考えているだろうか。

私の会社の竹とんぼ教材は結構人気があるが、商品の説明をしたらすぐにも買ってもらえる類の商品ではない。あなたは毎日全国の学校を訪問し竹とんぼの説明をするがなかなか買ってもらえない。そんな日が続くと「自分は何てくだらない仕事をしているのだろうか」「竹とんぼ教材の営業など意味があるのだろうか」「こんなつまらない事を商売にして喜んでいる社長に腹が立つ」とまあこんな気持ちになるのではないだろうか。

しかし、ここで少し視点を変えてもらいたい。竹とんぼを拡販するには全国の学校を回ることだけが仕事だろうか。竹とんぼのユーザーは子供とその親だ。そう考えれば遊園地や動物園などの売店でも売ってもらえるかもしれない。子供達が集まる場所におもちゃを卸している問屋はないだろうか。更には企業のノベルティ商品として使ってもらえるかもしれない。

次に、買ってくれるお客様のことを考えてみよう。竹とんぼで遊ぶ親は何を考えるだろう。たぶんまずは安全だ。今扱っている竹とんぼは安全への配慮ができていだろうか。PL（製造物責任賠償）保険には加入しているだろうか。また、「楽しむ」という観点からはどうだろう。最も遠くへ飛ばした人の学校名と氏名をホームページ上にアップし、記録更新者にはクラス人数分の竹とんぼをプレゼントするような企画はどうだろう。

竹とんぼを事業として考えれば、竹とんぼだって売上高より利益額が大切だ。であれば竹とんぼ教材のコスト削減はできないだろうか。竹材加工を中国でやってもらったら格段にコストが下がる。コストが半分になれば、今のままでも販売量が2倍になったのと同じになる。

このように考えていけば、たかが竹とんぼであってもやることはたくさんある。そうやって知恵を使って行動を広げていけば、大きな人的ネットワークが作られていく。そして、その中から新たなアイデアや大きなビジネスチャンスが出てくるのだ。

目の前の仕事をもっと大きな視点でとらえ、つまらない仕事を面白い仕事に変えていってもらいたい。「全てのものを楽しめと人生を与えられた」という意味が理解頂けたらだろうか。

以上

(文字数：993字)

第26回

「視野を拡げて人を見る」

社会に出て仕事をする上で一番難しいのは人間関係だろう。退職理由もよく聞けば人間関係が原因である場合が多い。今日は人間関係が少し楽になる考え方を紹介しよう。

皆さんが日頃嫌いだなと思っている人を思い浮かべ、なぜその人が嫌いなのか、その理由を3つほど挙げてもらいたい。人は対象を認知し、その認知したものを自分の知識や価値観などをもとに判断し、その判断に従って行動する。

今まで何度も述べてきたように、認知する対象自体は○でも×でもない場合が殆どだ。例えば、細かすぎる人というのは、正確な人だとか、よく気が利く人だとかのプラスの評価を受ける場合も多い。

この例のようにして、あなたが挙げた嫌いな理由を今度はその人を思い浮かべずに、その言葉だけを裏返してプラス面で捉えなおしてもらいたい。そして、皆さんが嫌いな理由として挙げた項目と、それをプラス面で捉えなおした項目をじっと眺めてみてほしい。何か感じることはないだろうか。

私にも嫌いなおっさんがいる。私はその人のことを自分勝手に冷たくて打算的だと思っている。これらの単語をプラス面で捉えなおしてみると、信念があり、情に流されず、権力欲がある人だということになる。これら6つの言葉を眺めてみて私を感じたのは、これはまさしく私自身の姿だということだった。考えてみれば私は自分勝手に人に冷たくて打算的だ。

殆どの人間はこういった自分の嫌な面を隠しながら、「いい子ぶりっこ」して生きている。そんな自分が隠している嫌な面が目の前に現れると人は嫌悪感を抱く。相手が嫌だと思うのは、その嫌な面を自分が持っているからだ。例えば、上司にゴマをする人を見て「あんな出世のことばかり考えている奴は嫌いだ」という人はほぼ間違いなく出生欲が強い。出生欲が全くない人は「なんであんなことするんだろう」くらいにしか感じないはずだ。

人は常に自分が正しくて他人が間違っていると思って生きている。しかし、人を毛嫌いして他人を見下すほど自分は立派な人間であろうか。あなたもあなたが毛嫌いしている人と同じくらい、人間として醜い面や嫌な面を持っているのではないだろうか。

このように考えても、嫌いだった人が好きになることはないかもしれないが、毛嫌いしなくてもすむようにはなる。自分の狭い見方で人を評価するのではなく、視野を拡げて人を眺めてみてはどうだろう。きっと、自分自身が救われると思う。

以上

(文字数：992字)

第27回

「視野を拡げて自分を見る」

人が意思決定をする場合、二つの情報を使っている。一つはボトムアップ情報と言われる五感を通して得られる情報。もう一つはトップダウン情報と言い、既に獲得され記憶の中にある情報である。「知識」「信念」「思い込み」などがそれで、心理学用語では「ビリーフ」と呼ばれている。

このビリーフとはやっかいなものだ。全ての人はそれぞれにビリーフを持っているが、殆どの場合ビリーフを無意識に信じ込んでいるので、自分がどんなビリーフを持っているかさえ自覚していない場合が多い。そして、そのビリーフが時として自分と他人を苦しめる。

先日ある会社の新人研修を行ったが、ある人が「人に悪く思われたくない」という強いビリーフを持っていた。そのビリーフ自体は悪くはない。回りの人に気を遣ったり自分の発言に注意したりすることは良好な人間関係を作る上で大切だ。しかし、それがあまり強すぎて回りの目に神経質になり過ぎると自分を苦しめてしまう。世の中には人の目を過度に気にせずに素敵な生き方をしている人もたくさんいる。

「人は素晴らしい人物になるべく努力すべし」という強いビリーフを持っている人もいる。基本的にそれはいいことだし、そんな人は前向きな人が多い。しかし、人間はそんなに強くないから、理想とする自分と現実の自分とのギャップに悩み続けなければならなくなる。こういったビリーフを持つ人は躁鬱質の人が多様な気もする。また、そのビリーフが他人に向かうと、素晴らしい人間になろうと努力してない人を見て、その人が嫌になったり、その人を攻撃したりする。

信念や自分のしっかりした考えを持つことは大切だが、それに拘りすぎると自分と他人を不幸にしてしまう。宗教心を持つことはいろんな意味でいいことが多い。しかし、信仰に拘りすぎて戦争になった例は歴史を見ても枚挙にいとまがない。

人はそれぞれに違ったビリーフを持っている。自分のビリーフが唯一絶対などと思わず、もっと自分を客観的に見ると同時に、他人のビリーフを冷静に受け止める余裕を持って生きてもらいたい。

僕は常に信念を持って人生の決断をしてきたと思っている。しかし、その事が猪突猛進の行動になってしまうこともしばしばだ。周りの人に「お前ももっと信念を持って行動しろ」なんて言うより、「俺は猪突猛進だから勝手にやらせてもらうよ」と言って行動する方が、周りも自分も何か気持ちが楽になるように思える。

以上

(文字数：995字)

第28回

「仕事への対し方」

最近、全く対照的な二人の事が妙に気になった。二人とも50歳前後だが、どんな人生を送ってきたかで人物にこれ程までに差がでるのかと感じた。

一人は高校卒業して食品加工会社の現場で働き、その会社で重役にまでなった人だ。食品加工の上工程、つまり原料となる肉や魚を加工する現場は猛烈な匂いである。そこで毎日肉を切ったり煮たりする仕事はかなり厳しい。そんな仕事をしながら重役までなった彼は今でも心から現場に居たいと言う。事務所で仕事をするより現場の方が数段楽しいらしい。

原料を加工する段階では不良部分がたくさんでる。切断の問題や解凍の問題など知恵を使えば製品の歩留まりは格段に違ってくる。切断の道具の問題、解凍の方法、全体の加工プロセスの変更など、現場を知り抜いている人には知恵はいくらでも湧き出してくる。そしてそのたった一人の頭の中から出てきた知恵が何億円という利益に繋がっていくのだ。彼は正に現場を楽しんでいる達人だ。

もう一人は超一流大学を出て都市銀行に就職し審査部というエリートコースを歩んだが、途中からエリートコースから外れ、関係のコンサルティング会社に出向し、そこも面白くないので早期退職優遇制度を使い退職金をガッポリもらった後、自分がコンサルで仕事をしていた会社に採用してもらったが、どこも長続きせずいまだに職と転々としている人だ。

話を聞くと愚痴ばかり。職場への不満、他人の悪口のオンパレードだ。どんな仕事も成果を出すのは簡単ではない。真剣に仕事をしてきた人は自分の経験の中で、耐え忍んだこと、苦勞して何かをつかんだこと、新しい方法を生み出したことなど、自信を持って語れる何かを持っている。それは多くの場合、画期的な発明や発見などではない。話を聞けば、「なるほどな」と思うあたりまえのことだけど、何かこう頭が下がるような素敵な経験だ。

有名な宮大工棟梁の西岡常一さんも元横綱の千代の富士も、若い頃大工にも相撲取りにもなりたくなかったらしい。若いうちの仕事は面白くないことの方が多い。もし若いのに「楽しく仕事をしています」と言う人がいたなら、かなりレベルの低い仕事をしているのだと思う。やりたくない仕事でも、それをコツコツと続けてゆくうちに、その仕事がかげがえのない仕事になってゆく。

君は50歳になって、素敵な人だと思われたいか、つまらない人だと思われたいか。仕事なんて何だっていい。

以上

(文字数：991字)

第29回

「苦しみは報われる」

先日、歌手の倅田來未がある女子中学校を訪問して「夢はかなう」という話しをしていた。目の前に本物の倅田來未が現れたので涙している女の子も少なくなかった。イチローにせよ松井にせよ、夢を叶えている人は素敵だ。そんな夢を叶えたスーパースターは、若い人達に大きなエネルギーを与えることができる。

しかし、子供の頃の夢が叶う人は一握りに過ぎない。倅田來未が準グランプリになったエイベックスが主催したオーディションは12万人が応募していた。つまり、11万9,999人は夢を叶えられなかったのだ。それが現実だ。

友人から小林恭二という作家の「父」という題名の小説を紹介された。小林恭二のお父さんは「神童」と言われていた秀才であった。東大を卒業し、大手鉄鋼会社に就職するのだが、健康の問題もあり結局は社長にはなれなかった。この作品の中で、著者は小説の主人公であるお父さんの人生を見ながら「人生とは自らの可能性に敗北する旅なのかもしれない」と言っている。心に引っかかる言葉だった。

人は若い頃自分の可能性に胸膨らませる。しかし、人生を歩んでゆく内に夢が叶えられないことを学んでゆく。小学校の時多くの人が夢見るプロスポーツ選手は、中学校になれば全国での自分の実力が分かり、実現は難しいことを知る。大学受験でも失敗する。就職も自分の思い通りにはいかない。就職しても自分の思い通りに出世はできない。

人生とは、自分が信じた自分の可能性の一つひとつ挫折してゆく旅と言えるかもしれない。そんな厳しい現実の中で人はどうやって希望を見出してゆけばよいのだろうか。私は「夢は叶う」より「苦しみは報われる」をいう言葉の方が、私達が救われる言葉であるような気がする。

息子は今中学のサッカー部の副キャプテンではあるがレギュラーメンバーではない。毎週土日、試合にも出れないのに休まず練習試合に行っている。かわいそうだなと思うが、彼の人生を考えると、今の経験は貴重な財産になると思う。今の経験を通して、弱い立場の人の気持ちも分かるようになるし、我慢することも覚える。

素敵な人は必ず苦しい局面を乗り越えてきている。その苦しい局面が、彼らに逞しさと人への優しさを与えたのは間違いない。著名人でなくても、素敵な人の周りには自然と人が集まる。苦しい経験は必ず何らかの形で報われる。夢は叶わずとも幸せになれる道はたくさんある。人生は捨てたものではない。

以上

(文字数：994字)

第30回

「自分の事は横に置いて」

先日、会計研修の時、遅れてきた受講生が休み時間に、遅れて来て聞き逃したことを質問にきた。その人の後ろにも質問者が待っているのにそんな事はお構いなし。その後も自分の会社の税金を減らす方法ばかり質問する。この姿を見て「この人は一事が万事自分中心なんだろう。これでは幸せになれないだろうな。」と思った。

いつも人間は自分中心だ。人間は自分の思い通りに出来ている時に幸せを感じる。この自分を大切にする気持ちを否定するつもりはない。これこそが人間のエネルギーの源泉かもしれない。しかし、いつまでも自分の事に執着している人は幸せにはなれないと思う。

今「自分はこんな仕事は好きになれない」とか「こんな仕事をしていて意味があるのだろうか」とか「この仕事は自分には合っていない」とかと思っている人が多いのではないだろうか。しかし、このように自分を中心に仕事を見ているとなかなか幸せにはなれないような気がする。

そういう私自身、今やっている研修講師という仕事は自分には合っていないと思っている。そもそも技術屋で人の前で話しをするのは得意ではない。一人で本を読んだり物作りをしていた方が好きなタイプ人間だ。だから、研修の仕事がある朝はいつも気分が優れない。研修がうまく行かないわけではない。いつも好評を頂いている。でも、自分に合っていないと思っているから気分が優れないのだ。

朝起きてから電車で研修会場に向かう間も、研修の事を考えている。その中で次第に「自分が研修講師に向いているかどうかなんて関係ない。主役は受講生であり、受講生の皆さんに何か役に立ち、受講生の皆さんが明日から仕事を行う上で何かヒントを見つけて下さればそれでいいのだ。」という気持ちに変ってくる。そして、心の中から「自分」という感情がなくなった時、心が自由になり、何のわだかまりもなく気持ちよく研修に向かうことができるようになる。

事業で成功している社長さんを見ても、最初は成功しようとして事業を始められたのだろうが、どこかで自我や自分の欲を捨てておられるのが分かる。逆にそうでなければ大きな成功はないような気がする。

松下幸之助と言えば、我々から見れば思い通りの人生を送った人のように思える。しかし、彼は晩年こう語っている。「これまでの自分の人生はね、自分の人生であって全然自分の人生ではなかった。なにひとつ、自分のしたいことができなかつたですよ。」

以上

(文字数：996字)

第31回

「自分の道」

今まで私のコラムは厳しい話しや夢のない話しが多かった気がする。このコラムの目的は若い人達を勇気づけることだと思っている。しかし、人生はやりたい事や楽しい事ばかりではない。いいことばかりではない人生だが、だからと言って捨てたものではないこの人生を、一人ひとり現実と直面しながら逃げずに生きてもらいたいと思っていつも書いてきた。

人生の事が少しは分かった大人のふりをして書いてきたが、僕自身何も分かっていない。人間関係でも苦しんでいるし、仕事の成果が出ないこともしばしばだ。いまだに明確な人生のビジョンもなければ、大きなリスクを取る勇氣もない。この分野では負けないといった得意分野があるわけでもない。いつも悶々としながら生きているというのが現実だ。

他人はいかにも幸せそうに見えても、殆どの人は大なり小なり人生に悩みを抱えながら生きている。私は今まで完璧な人というのを見たことがない。「世の中は変人と人間としての重要な部分が欠落している人の集まりだ」と思っている。だれもが人間として大きな欠陥を持っている。だから人はそれぞれに頭を打ちながら生きている。

能力にも違いがあるから、他人に出来ることが自分に出来ないということがたくさんある。「能力が高い人はいいな」と思う。以前家内に「頭のいい人はいいな」と愚痴ったら、彼女は「頭のいい人はもっと難しいことを考えなくちゃならないのよ」との名言を吐いた。確かにそうだ。だから能力の低い人も能力の高い人もそれなりに苦しんでいる。

人間はどこにいても、何をしても、いくつになってもそれなりに悩みながら生きている。若い君達だけが悩んでいるわけではないのだから安心してほしい。だが、そう言われると逆に将来に夢も希望もなくなるかもしれない。

しかし、世の中が「変人と欠陥者の集まり」だと思えば、自分と違った考え方の人も許せはしないだろうか。だって、自分も他人から見れば結構変った人間なのだから。また、能力に関しても、他人や、自分の理想形と今の自分を比較してばかりいると気がめいてくるが、今自分が生きていて、何かが出来ているという事実で感謝できれば、希望が広がってきはしないだろうか。私達は結局自分が出来ることしか出来ないのだ。

人と比較したり、自分の理想とのギャップに思い悩まず、今自分の出来ることを一つひとつ積み重ね、あなた自身の道を歩んでいってほしい。

以上

(文字数：991字)

第32回

「志高く」

今年もまたアツと言う間に最後のコラムになった。昨年の最後のコラムは挑戦することの大切さを書いた。今年は志について書きたいと思う。

我々の世代は将来歴史の教科書に登場し「あの頃の人達は、自分達の欲望を際限なく満たそうとし、化石燃料を使い果たし、環境を破壊し、必要以上に食い散らかし、その結果自らの体をダメにし、膨大な医療費を使った。そして、次の世代になんら価値あるものを残さなかった。」と我々自身の子孫から軽蔑されるだろう。

逆に、我々の先輩達は立派な人が多かった。江戸城無血開城の英断で、日本は欧米の植民地にならずにすんだ。江戸時代の藩校や寺子屋という教育制度のおかげで、明治維新からわずか30年ほどでロシアに勝利する程の国になった。我々は先輩諸氏が築き上げてくれた文化と文明のおかげで現在とても幸せな日々を送っている。

人間社会というのは不思議なもので、今我々が幸せに暮らせているのは殆ど先輩達のお陰である。企業においても今働いて利益を出しているのは我々かもしれないが、それは先輩達が営々と築いてきてくれた技術や仕組みや信頼のおかげである場合が多い。

では、我々は次の世代のため何をすべきなのだろうか。仕事をして利益を上げることは大切なことだ。しかし同時に、次の世代の人達の前で胸を張れる仕事をしているか、日々の仕事をしながらも、いつもそんなことを考えていてもらいたいと思う。

こんなことを書くと、純粋な人達は「営利団体なんかには居てはダメだ。」と考えるかもしれない。しかし、人は結局だれかの役に立つことで生きている。どんな団体に所属していても人の役に立つことをしているはずだ。違いがあるのは、お金がどんな形でその団体に入ってくるかだけだ。企業は商品やサービスの対価の形で、お役所は税金の形で、ボランティア団体は寄付の形で入ってくる。だからどんな仕事をしていても同じだ。

多くの人は企業で働くことによって自分と自分の家族の命をつないでいる。人間は先ず生きていかなければならない。仕事の一側面として、そういうかけがえのない生活者の視点も持っていてもらいたいと思う。

しかし、コラムの最終回として皆さんに一番お願いしたいのは、利益を超えて人間として何をすべきかという高い志を持って仕事に取り組んでもらいたいということだ。我々は自分達の幸せを追求すると同時に、次の世代の人達のためになすべきことがあるはずだと思う。

以上

(文字数：998字)